

－ 洗 礼 －

2014年6月 釧路管轄司祭ステファン内田 作成

啓蒙式

用意した洗礼着・アイコン・十字架・福音書等は洗礼盤前の祭台に置く。

洗礼を受ける者は、上着・被り物・マフラー・手袋、靴下等を脱ぎ、頭・顔・首（つけねまで）・手（手首まで）・足（くるぶしまで）肌が露出するようにする。

聖堂であれば啓蒙所（又は入口付近）に、聖所を向くように立つ。代父母はその左右に立つ。

司祭は洗礼を受ける者の顔に3度息を吹きかけ十字を書く。これを3度繰り返す。司祭は洗礼を受ける者の頭に手を載せて洗礼式を始める。

輔祭) ^{しゅ いの}主に禱らん、



しゅあわれめよ。
主 憐

司祭) (^{しゅ しんじつ かみ なんぢ なんぢ どくせいし なんぢ せいしん な よ わて}黙誦: 主、眞實の神、爾と爾の獨生子と爾の聖神との名に依りて、我が手を、
^{なんぢ ぼくひ なんぢ せい な はし つ なんぢ つばさ おおい した まも え}爾の僕(婢)(某)、爾の聖なる名に趨り付き、爾が翼の覆の下に守らるるを得
^{もの の そ ふる まよい かれ さ なんぢ お しん ぼう あい かれ み たま}たる者に按す、夫の舊き迷を彼より去りて、爾に於ける信・望・愛を彼に満て給
^{かれ ただなんぢ およ なんぢ どくせいし わ しゅ およ なんぢ せいしん}え、彼が、唯爾、及び爾の獨生子、我が主イイススハリストス、及び爾の聖神
^{まこと かみ し ため かれ なんぢ ことごと いましめ おこな なんぢ よろこ}のみ、眞の神なりと知るが爲なり、彼に、爾が悉くの誠を行ひ、爾に悦
^{こと まも たま けだしひとも これ おこな これ よ い かれ なんぢ}ばるる事を守らしめ給え、蓋人若し此を行はば、此に因りて生きん、彼を爾が
^{いのち ふみ する かれ なんぢ よつぎ むれ あわ たま ねがわ なんぢ なんぢ しいい こ}生命の冊に録し、彼を爾が嗣業の群に合せ給え、願くは爾と、爾の至愛の子
^{わ しゅ いのち ほどこ なんぢ しん せい な かれ うち さんえい}我が主イイススハリストス、生命を施す爾の神との聖なる名は、彼の衷に讃榮せ
^{ねがわ なんぢ め つね あわれみ もつ かれ み なんぢ みみ かれ いのり こえ き}られん、願くは爾の目は常に憐を以て彼を視、爾の耳は彼が禱の聲を聆き
^{い かれ そのて しわざ そのことごと やから おい たのし たま かれ なんぢ ふ}納れん、彼を其手の所爲と其悉くの族とに於て樂ましめ給え、彼が爾を伏し
^{おが なんぢ しいいこう な さんえい なんぢ う みと しょうがいなんぢ ほ あ}拜み、爾の至大至高なる名を讃榮して爾を承け認め、生涯爾を讃め揚ぐるが
^{ため}爲なり、)

司祭) ^{けだしてんぐんみななんぢ うた こうえい なんぢちち こ せいしん き いま いつ よよ}蓋天軍皆爾を歌う、光榮は爾父と子と聖神に歸す、今も何時も世世に、



アミン。

輔祭) ^{しゅ いの}主に禱らん、



しゅあわれめよ。
主憐

司祭) (黙誦：^{あくま しゅ なんぢ いまし すなわちなんぢ ぼうぎやく ほろぼ ひとびと すく いだ}悪魔よ、主は爾に禁む、即 爾の暴虐を滅し、人人を救い出す

^{ため よ きた ひとびと あいだ いま しゅ ひくら ちふる はかひら せいじん からだ}が爲に世に來りて人人の間に在しし主、日暗み、地震い、墓啓け、聖人の軀

^{お とき き あ てきぐん か しゅ し もつ し ほろぼ し けん たも もの すなわち}の起くる時、木に在りて敵軍に勝ちし主、死を以て死を滅し、死の權を有つ者、即

^{なんぢあくま むなし しゅ いのち き あらわ これ まも ため おのづか}爾 悪魔を虚うせし主なり、生命の樹を顯し、之を守るが爲に、ヘルヴィムと 自

^{まわ ほのお つるぎ お たま かみ もつ われなんぢ いまし よろ いまし}ら旋る 焰の劍とを置き給いし神を以て、我 爾に禁む、宜しく 禁めらるべし、

^{そくが ゆ ごと うみ おも ふ もの かぜ はげ いまし もの め もつ ふち か}夫の陸を行くが如く、海の面を履みし者、風の厲しきを 禁めし者、目を以て淵を涸

^{おどし もつ やま と もの よ われなんぢ いまし けだしかれみづか いま われら}らし、威嚇を以て山を融かす者に因りて、我 爾に禁む、蓋 彼 親ら、今も我等

^{もつ なんぢ いまし おそ い こ ぞうぶつ しりぞ またこれ かえ なか その}を以て 爾に禁む、畏れよ、出でよ、此の造物より 退けよ、復之に返る 母れ、其

^{うち ひそ なか これ あ なか あるい これ かん よろ ひる あるとき あるい}中に潜む 母れ、之に遇う 母れ、或 は之に感ずること、夜に、晝に、或 時に、或

^{まひる おい なか すなわちそな ところ しんばん おおい ひ いた なんぢ ぢごく}は正午に於てする 母れ、乃 備えし 所の 審判の大なる日に至るまで 爾の地獄

^{さ ざ ふち かんが かみ すなわちしんし しんししゅ ほうざ けんべい しゅせい}に去れ、ヘルヴィムに坐して淵を 瞰む神、即 神使・神使首・寶座・權柄・主制・

^{のうりよく しゅりょう たもく りくよく おのの しゅ てん ち うみ およ}能 力・首 領・多目のヘルヴィム・六翼のセラフィムが 戦く主、天・地・海、及

^{およ そのうち あ もの おのの しゅ おそ い すで しる あらた えら}び凡そ其中に在る者が 戦く主を畏れて出でよ、已に印されし 新に選ばれたるハ

^{わ かみ ぐんし しりぞ か かぜ つばさ ゆ ほのお もつ そのししや な}リストス我が神の軍士より 退けよ、彼の風の翼にて行き、 焰を以て其使者と爲す

^{もの よ われなんぢ いまし い およそ なんぢ ちから なんぢ つかいら とも こ}者に因りて、我 爾に禁む、出でよ、凡の 爾の力と 爾の使等と偕に、此の

^{ぞうぶつ しりぞ}造物より 退けよ、)

司祭) ^{けだしちち こ せいしん な さんえい いま いつ よよ}蓋 父と子と聖神の名は讚 榮せられたり、今も何時も世世に、



ア ミ ン。

輔祭) ^{しゅ いの}主に禱らん、



しゅあわれ めよ 。
主 憐

司祭) (^{せい そのことごと ぎょうじ けんりよく おい おそ こうえい さと かた}黙誦: 聖にして其 悉 くの行事と堅 力とに於て、畏るべく、光 榮なる、悟り難

^{はか かた かみ なんぢ あくま えいえん くるしみ ぼつ あらかじ さだめ しゅ われらその}く量り難き神、爾 に、悪 魔よ、永 遠の 苦 の罰を 豫 め定めし主は、我等其

^{ふとう ぼくひ もつ なんぢ およそ なんぢ どうろう ぐん めい わ しゅ}不 當なる僕 婢を以て、爾 と 凡 の 爾 が同 勞の 軍とに命じて、我が主 イススハリ

^{われら まこと かみ な もつ あらた しる もの しりぞ こ ゆえ われ}ストス、我等の 眞 の神の名を以て、新 に印されし者より 退 かしむ、是の故に、我

^{なんぢ いた あ ふじょう けがら いと うと じゃしん てん あ}爾、至りて悪 しき、不 淨なる、穢 わしき、厭 うべき、疎 ましき邪 神に、天に在り

^{ち あ ことごと けん たも かつ みみしい おし あくき ひと}地に在る 悉 くの權を有つ イススハリストス、曾て 聾 にして啞なる悪 鬼に、人よ

^{い ふたたびこれ い なか い しゅ ちから もつ いまし しりぞ なんぢ むな}り出でて 再 之に入る 母れと曰いし主の 力 を以て 禁 む、退 け、爾 の虚しき

^{ちから ぶた けん たも さと なんぢ ねがい よ ぶた むれ い なんぢ}力 の、豕にだも 權を有たざるを覺れよ、爾 の 願 に由りて豕の群に入ることを 爾

^{めい もの おぼ かみ すなわちめい もつ ち みづ うえ かた てん つく はかり}に命ぜし者を憶えよ、神、 即 命を以て、地を水の上に固め、天を造り、準 を

^{もつ やま た のり もつ たに さだ すな もつ うみ さかい かぎ たいすい おも かた みち}以て山を建て、矩を以て谷を定め、沙を以て海の 堺 を限り、大 水の面に堅き途

^{た やま ふ けむりた ひかり ころも ごと き てん まく ごと は みづ うえ}を立て、山に触れて煙 立たしめ、光 を袍 の如く衣、天を幕の如く張り、水の上に

^{そのみや た ち かた もとい お よよ うご いた うみ みづ め ぜんち おもて}其 宮を建て、地を固き 基 に置きて世 世に動かざるを致し、海の水を召して全地の 面

^{そそ しゅ おそ い せい こうしょう おのれ そな もの しりぞ わ しゅ}に注ぐ主を畏れよ、出でて、聖なる光 照に己を備うる者より 退 けよ、我が主イ

^{すくい え くるしみ そのそんたいそんけつ およ そのおそ らいりん}イススハリストスの 救 を得せしむる 苦、其 尊體 尊血、及び其畏るべき來 臨を

^{もつ われなんぢ いまし けだしかれぜんち しんぱん もの きた おそな しこう なんぢ}以て、我 爾 に 禁 む、蓋 彼全地を審 判する者は來りて 遅 わらず、而して 爾

^{なんぢ どうろう ぐん むし いこ ひ き そと やみ な い まんか}と 爾 が同 勞の 軍とを、蟲の息 わず火の滅えざる外の暗に投げ入れて、満 火のゲエン

^{くるし}ナに 苦 ましめんとす、)

司祭) ^{けだしけん わ かみ ならび ちち せいしん き いま いつ よよ}蓋 權は、ハリストス我が神に、 并 に父と聖 神とに歸す、今も何時も世 世に、



アミン。

輔祭) 主に禱らん、



しゅあわれめよ。
主憐

司祭) (黙誦: 主「サヴァオフ」イズライリの神、 諸の病と 諸の疾とを醫す者よ、
なんぢ ぼくひ かえり あくま ことごと はたらき たづ ただ かれ とお ふじょう
爾の奴婢を顧み、悪魔の悉くの動作を尋ね糾して彼より遠ざけよ、不浄なる
あくき いまし これ おい なんぢ て ぞうぶつ いさぎよ なんぢ と しわざ もち
悪鬼ら禁めて之を逐ひ出だし、爾が手の造物を潔くせよ、爾が敏き所爲を用い
すみやか にかれ あしもと たお これ そのふじょう あくき か たま
て、速に「サタナ」を彼の足下に殪し、此と其不浄なる悪鬼とに勝たしめ給え、)

司祭) 彼が爾より 憐を受けて、 爾の不死なる 天上の機密を獲、 光榮を 爾父と子と

せいしん たてまつ ため いま いつ よよ
聖神に 獻らんが爲なり、 今も何時も世に、



アミン。

輔祭) 主に禱らん、



しゅあわれめよ。
主憐

司祭) (黙誦: 永在の主 宰・主、 人を 爾の像と 肖とに依りて造り、 彼に 永遠の生命の
けん あた のち つみ もつ はな お もの みす すなわちなんぢ じんたい
權を予え、後に罪を以て離れ落ちし者を見棄てず、 乃 爾のハリストスの人體を
と よ よ すくい た しゅ なんぢみづか こ なんぢ ぞうぶつ てき どれい すく
取るに由りて世の救を立てし主よ、 爾親ら此の 爾の造物をも 敵の奴隷より 救い
なんぢ じょうてん くに う かれ たましい め ひら かれ うち なんぢ ふくいん ひかり
て、 爾が 上天の國に受けよ、 彼が 靈の目を啓きて、 彼の内に 爾が福音の光
かがや いた たま かれ いのち こうめい しんし かれ およそ あくてき はかりごと
の輝くを致させ給え、 彼の生命に、 光明の神使、 彼を 凡の悪敵の 計、
きょうあくしゃ いであい まひる あくき あ まぼろし まぬか もの あわ たま
凶悪者の遇會、 正午の悪鬼、 悪しき幻像より 免れしむる者を合せ給え、)

司祭) 彼の心に隠れ潜む 凡の凶悪なる不浄の氣を彼より逐い出だせ、

司祭は洗礼を受ける者の口・額・胸元に息を吹きかける。

かれ ころろ かく ひそ およそ きょうあく ふじょう き かれ お い
彼の心に隠れ潜む凡の凶悪なる不浄の氣を彼より逐い出だせ、

司祭は洗礼を受ける者の口・額・胸元に息を吹きかける。

かれ ころろ かく ひそ およそ きょうあく ふじょう き かれ お い
彼の心に隠れ潜む凡の凶悪なる不浄の氣を彼より逐い出だせ、

司祭は洗礼を受ける者の口・額・胸元に息を吹きかける。

司祭) (黙誦: まよい き こうかつ き ぐうぞうれいはい およそ むさぼり き いつわり き あくま おしえ
迷の氣、狡猾の氣、偶像禮拜と凡の貪婪との氣、偽の氣、惡魔の教

よ おこな およそ けがれ き お い かれ なんぢ せい むれ
に因りて行わるる凡の汚の氣を逐い出だして、彼を爾のハリストスの聖なる群の

れいち ひつじ なんぢ きょうかい とうと えだ なんぢ くに こ およ よつぎ な たま かれ
靈智なる羊、爾の教會の貴き肢、爾の國の子、及び嗣業と爲し給え、彼が

なんぢ いましめ したが いのち わた しるし やぶ たも ころも けが まも
爾の誠に遵いて生命を度り、印の破れざるを保ち、衣の汚れざるを守りて、

なんぢ くに おい せいじん さいわい う ため
爾の國に於て聖人の福を享けんが爲なり、)

司祭) なんぢ どくせいし おんちょう じれん じんあい よ なんぢ かれ しせいしぜん いのち
爾が獨生子の恩寵と慈憐と仁愛とに因りてなり、爾は、彼と至聖至善にして生命を

ほどこ なんぢ しん とも あが ほ いま いつ よよ
施す爾の神と偕に崇め讃めらる、今も何時も世に、



ア ミ ン。

洗礼を受ける者は聖堂出口に向きを変え、両手を前に突き出して惡魔を拒絶する姿勢を示す。

司祭) およ そのことごと しわざ そのことごと つかい そのことごと つとめ そのことごと ほこり
サタナ及び其悉くの所行、其悉くの使、其悉くの勤、其悉くの矜を

す
祛つるか、

洗礼を受ける者は「祛つ」と口に出して答える。幼児等の場合は代父母が代わりに答える。

司祭) およ そのことごと しわざ そのことごと つかい そのことごと つとめ そのことごと ほこり
サタナ及び其悉くの所行、其悉くの使、其悉くの勤、其悉くの矜を

す
祛つるか、

洗礼を受ける者は「祛つ」と口に出して答える。

司祭) およ そのことごと しわざ そのことごと つかい そのことごと つとめ そのことごと ほこり
サタナ及び其悉くの所行、其悉くの使、其悉くの勤、其悉くの矜を

す
祛つるか、

洗礼を受ける者は「祛つ」と口に出して答える。

司祭) サタナを祛てしか、

洗礼を受ける者は「祛てり」と口に出して答える。

司祭) サタナを祛てしか、

洗礼を受ける者は「祛てり」と口に出して答える。

司祭) サタナを祛てしか、

洗礼を受ける者は「祛てり」と口に出して答える。

司祭) これ うそぶ これ つばき
之に嘘き、之に唾せよ、

洗礼を受ける者は唾して悪魔を拒絶する姿勢を示す。この後、手を降して聖所に向きを変える。

司祭) ハリストスに配合するか、

洗礼を受ける者は「配合す」と答える。

司祭) ハリストスに配合するか、

洗礼を受ける者は「配合す」と答える。

司祭) ハリストスに配合するか、

洗礼を受ける者は「配合す」と答える。

司祭) ハリストスに配合せしか、

洗礼を受ける者は「配合せり」と答える。

司祭) 彼を信ずるか、

洗礼を受ける者は「彼を王及び神と信ず」と答える。

*続いて次のように信経を誦す、

われしん ひとつ しみ ちち ぜんのおしや てん ち み み ばんぶつ つく しゅ また
我信ず、一の神・父・全能者、天と地、見ゆると見えざる萬物を造りし主を、又
しん ひとつ しゅ しみ かみ どくせい こ よろづよ さき ちち うま ひかり
信ず、一の主イイスハリストス神の獨生の子、萬世の前に父より生れ、光よりの
ひかり まこと かみ まこと かみ うま もの つく あら ちち いったい ばんぶつかれ
光、眞の神よりの眞の神、生れし者にて造られしに非ず、父と一體にして萬物彼
つく われらひとひと ため またわれら すくい ため てん くだ せいしんおよ どうていちよ
に造られ、我等人人の爲、又我等の救の爲に天より降り、聖神及び童貞女マリ
み と ひと われら ため ときじゅうじか くぎ くるしみ う
ヤより身を取り人となり、我等の爲に、ポンティイピラトの時十字架に釘うたれ、苦を受
ほうむ だいさんじつ せいしよ かな ふくかつ てん のぼ ちち みぎ ざ こうえい あらわ
け葬られ、第三日に聖書に應いて復活し、天に升起、父の右に坐し、光榮を顯し
い もの し もの しんばん ため またきた そのくにおわり またしん せいしん
て生ける者と死せし者とを審判する爲に還來り、其國終なからんを、又信ず、聖神・
しゅ いのち ほどこ もの ちち い ちちおよ こ とも おが ほ よげんしゃ もつ かつ
主・生を施す者、父より出で、父及び子と共に拜まれ讃められ、預言者を以て嘗て
い またしん ひとつ せい おおやけ しと きょうかい われみと ひとつ せんれい もつ
言いしを、又信ず、一の聖なる公なる使徒の教會を、我認む、一の洗禮、以て
つみ ゆるし う われのぞ ししゃ ふくかつ ならび らいせい いのち
罪の赦を得るを、我望む、死者の復活、並に來世の生命を、アミン。

司祭) ハリストスに配合せしか、

洗礼を受ける者は「配合せり」と口に出して答える。

司祭) 彼を信ずるか、

洗礼を受ける者は「彼を王及び神と信ず」と口に出して答える。

司祭) 彼に伏拜せよ、

洗礼を受ける者は「父と子と聖神、一體にして分れざる聖三者

に伏拜す。」と口に出して答え、跪いて伏拜する。

司祭) 崇め讃めらるる哉神、衆人が救を得、眞理を知るに至らんことを欲する者よ、今も

いつよよ
何時も世世に、



アミン。

輔祭) ^{しゅ いの}主に禱らん、



しゅあわれめよ。
主 憐

司祭) (黙誦: ^{しゅさい しゅ われら かみ なんぢ ぼくひ}主宰・主・我等の神よ、^{なんぢ せい こうしょう め たま}爾の僕(婢)(某)を、爾の聖なる光照に召し給

^{かれ こ なんぢ せいせん おおい おんちよう え}え、彼に此の爾の聖洗の大なる恩寵を得せしめ、^{かれ ふる のぞ}彼の舊きを除き、^{かれ えいえん}彼を永遠

^{いのち ため あらた}の生命の爲に新にし^{かれ なんぢ せいしん ちから み}彼に爾が聖神の力を満てて、^{なんぢ}爾のハリストスに^{たいごう}體合せし

^{たま}め給え、^{かれ おのれ にくしん こ}彼が己に肉身の子たるに^{あら}非ずして、^{なんぢ くに こ}爾の國の子とならんが^{ため}爲なり、)

司祭) ^{なんぢ ぞくせいし じんあい おんちよう よ}爾の獨生子の仁愛と恩寵とに依りてなり、^{なんぢ かれ しせいしぜん}爾は彼と至聖至善にして^{いのち ほどこ}生命を施す

^{なんぢ しん とも あが ほ}爾の神と偕に崇め讃めらる、^{いま いつ よよ}今も何時も世世に、



アミン。

聖洗禮儀

司祭は洗盤に爐儀を行う、

輔祭) ^{きみ しゅくさん}君よ、祝讃せよ、

司祭) ^{ちち こ せいしん くに あが ほ}父と子と聖神の國は崇め讃めらる、^{いま いつ よよ}今も何時も世世に、



アミン。

【 大聯禱 】

輔祭) ^{われらあんわ}我等安和にして^{しゅ いの}主に禱らん、



しゅあわれめよ。
主 憐

輔祭) ^{うえ くだ あんわ われら たましい すくい}上より降る安和と我等が靈の救の爲に^{ため しゅ いの}主に禱らん、



しゅ あわれ め よ 。
主 憐

輔祭) 全世界の安和、神の聖なる諸教會の堅立、及び衆人の合一の爲に主に禱らん、



しゅ あわれ め よ 。
主 憐

輔祭) 此の聖堂、及び信と慎と神を畏るる心とを以て此に来る者の爲に主に禱らん、



しゅ あわれ め よ 。
主 憐

輔祭) 教會を司る尊貴なる我等の全日本の府主教ダニイル、尊貴なる我等の仙台の大

主教セラフィム、司祭の尊品、ハリストスに因る輔祭職、悉くの教衆、及び

衆人の爲に主に禱らん、



しゅ あわれ め よ 。
主 憐

輔祭) 我國の天皇、及び國を司る者の爲に主に禱らん、



しゅ あわれ め よ 。
主 憐

輔祭) 此の水が聖神の能力と擧動と庇蔭とに藉りて聖にせらるるが爲に主に禱らん、



しゅ あわれ め よ 。
主 憐

輔祭) 此に救の恩寵、イオルダンの降福の遣さるるが爲に主に禱らん、



しゅ あわれ め よ 。
主 憐

輔祭) 此の水に永在三者の潔を爲す擧動の降るが爲に主に禱らん、



しゅ あわれ め よ 。
主 憐

輔祭) 我^{われ}等^らが^{せいしん}聖^{せい}神^{しん}の^{おおい}庇^ひ蔭^{いん}に^よ藉^{せき}りて、^{えいち}睿^{えい}智^ちと^{けいけん}敬^{けい}虔^{けん}との^{ひかり}光^{こう}に^て照^{てい}ら^るが^{ため}爲^{ため}に^{しゅ}主^{しゅ}に^{いの}禱^{いた}らん、



しゅ あわれ め よ 。
主 憐

輔祭) 此^この水^{みづ}が^み見^みゆると^み見^みえざる^{しよてき}諸^{しよ}敵^{てき}の^{ことごと}悉^{しつ}くの^{あくぼう}悪^{あく}謀^{ぼう}を^{しりぞ}祛^{しり}くる^{もの}者^{もの}と^{あらわ}顯^{あら}る^{ため}が^{しゅ}爲^{しゅ}に^{いの}主^{いた}に^{いの}禱^{いた}らん、



しゅ あわれ め よ 。
主 憐

輔祭) 此^この^{うち}内^{うち}に^{せん}洗^{せん}を^う領^うくる^{もの}者^{もの}が、^{ふきゆう}不^ふ朽^{きゆう}の^{くに}國^{くに}に^い入^いる^たに^{もの}堪^たうる^{ため}者^{しゅ}とな^{いの}る^{ため}が^{しゅ}爲^{しゅ}に^{いの}主^{いた}に^{いの}禱^{いた}らん、



しゅ あわれ め よ 。
主 憐

輔祭) 今^{いま}聖^{せい}なる^{こうしょう}光^{こう}照^{しょう}に^つ就^{じゆ}く^{もの}者^{もの}、^{およ}及^{およ}び^{そのすくい}其^{その}救^{きう}の^{ため}爲^{しゅ}に^{いの}主^{いた}に^{いの}禱^{いた}らん、



しゅ あわれ め よ 。
主 憐

輔祭) 彼^{かれ}が^{ひかり}光^{こう}の^こ子^こ及^{およ}び^{えいふく}永^{えい}福^{ふく}の^{よつぎ}嗣^しと^な爲^{ため}る^{しゅ}が^{いの}爲^{しゅ}に^{いの}主^{いた}に^{いの}禱^{いた}らん、



しゅ あわれ め よ 。
主 憐

輔祭) 彼^{かれ}が^わハリス^わトス^{かみ}我^しが^し神^{しん}の^{ふくかつ}死^しと^{せつごう}復^{せつ}活^{ごう}とに^{これ}接^{けつ}合^{ごう}せ^{ぶん}ら^{ため}れて、^{しゅ}之^{しゅ}に^{いの}分^{ぶん}ある^{ため}が^{しゅ}爲^{しゅ}に^{いの}主^{いた}に^{いの}禱^{いた}らん、



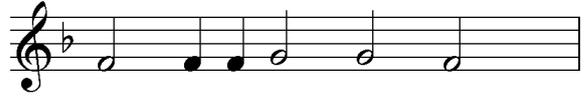
しゅ あわれ め よ 。
主 憐

輔祭) 彼^{かれ}が^わハリス^わトス^{かみ}我^しが^し神^{しん}の^{おそ}畏^{おそ}る^ひべき^{おい}日^{せい}に^{ころも}於^{せい}て、^{せいしん}洗^{せい}禮^{しん}の^{へいし}衣^いと^{けがれ}聖^{せい}神^{しん}の^{きず}聘^{へい}質^{しつ}の^{きず}汚^{けがれ}なく^{きず}玷^{きず}な
きとを^{まも}守^{ため}る^{しゅ}が^{いの}爲^{しゅ}に^{いの}主^{いた}に^{いの}禱^{いた}らん、



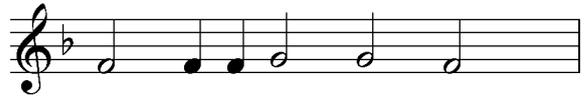
しゅ あわれ め よ 。
主 憐

輔祭) ^{こ みづ かれ ため ふくせい よくぼん しょざい ゆるし ふきゆう ころも ため しゅ いの}此の水が彼の爲に、復生の浴盤、諸罪の赦、不朽の衣となるが爲に主に禱らん、



しゅ あわれ め よ 。
主 憐

輔祭) ^{しゅ かみ われら いのり こえ き い ため しゅ いの}主・神が我等の禱の聲を聆き納るるが爲に主に禱らん、



しゅ あわれ め よ 。
主 憐

輔祭) ^{かれおよ われら もろもろ うれい いかり あやうき まぬか ため しゅ いの}彼及び我等が諸の憂愁と忿怒と危難とを免るるが爲に主に禱らん、



しゅ あわれ め よ 。
主 憐

輔祭) ^{かみ なんぢ おんちょう もつ われら たす すく あわれ まも}神よ、爾の恩寵を以て、我等を助け救い憐み護れよ、



しゅ あわれ め よ 。
主 憐

輔祭) ^{しせいしけつ いた さんび われら こうえい ぢよさい しょうしんぢよ えいていどうぢよ}至聖至潔にして至りて讚美たる我等の光榮の女宰・生神女・永貞童女マリヤと、

^{しよせいじん きおく われらおのれ みおよ たがい おのおの み もつ ならび ことごと われら}諸聖人とを記憶して、我等己の身及び互に各の身を以て、并に悉くの我等の

^{いのち もつ かみ いたく}生命を以て、ハリストス神に委託せん、



しゅ なんぢ に 。
主 爾

司祭) (黙誦: ^{じんじあいれん かみ しんぶく こころ ひとりひと ひそか こと しもの けだしもの}仁慈愛憐の神、心腹を試み、獨人の隠なる事を知る者よ、蓋物と

^{なんぢ まえ あらわ すなわちみなはだか なんぢ め まえ あらわ わ こと}して、爾の前に著れざるなし、乃皆裸にして爾の目の前に露る、我が事を

^{し しゅ もと われ い なか なんぢ かんばせ われ さ なか つうかい よ ひとびと}識る主よ、求む我を忌む勿れ、爾の顔を我より避くる勿れ、痛悔に依りて人人

^{つみ じよ もの こ と き おい わ つみ みと なか わ からだ けがれ たましい}の罪を恕する者よ、是の時に於て我が罪を認むる勿れ、我が體の汚と靈の

けがれ あら われぜんじん なんぢ かんぜん み ちから しんれい みぎ て もつ せい
穢とを滌い、我全人を、爾の完然なる見えざる力と神靈の右の手とを以て聖
わ たじん じゆう つた およ しん そな もの これ あた みづか つみ どれい
にせよ、我が侘人に自由を傳え、及び信の備われる者に之を與えて、自ら罪の奴隷
なんぢ い かた じんあい あづか もの ため ああひとり ぜん
として、爾の言い難き仁愛に與らざる者とならざらんが爲なり、嗚呼獨・善にし
ひと あい しゅさい ねがわ われはぢ う しりぞ すなわちうえ われ
て人を愛する主宰よ、願くは我辱を受けて退けられざらん、乃上より我に
ちから つかわ いまこ なんぢ おおい てんじょう きみつ おこな ため われ かた たま
力を遣して、今此の爾の大なる天上の機密を行が爲に我を堅め給え、
われふとう もの よ さいせい ほつ もの うち なんぢ しる かれ
我不當の者に依りて再生せんと欲する者の中に、爾のハリストスを銘せよ、彼を
なんぢ しょしと しょよげんしゃ もとい た うご なか かれ しんり うえもの
爾の諸使徒と諸預言者との基に建てて揺かしむる勿れ、彼を眞理の植物として、
なんぢ せい こう した きょうかい う つ ぬ なか かれ よ そのけいけん すす
爾の聖・公・使徒の教會に植え附けて抜く勿れ、彼に因りても、其敬虔に進む
もつ なんぢちち こ せいしん しせい な さんえい ため いま いつ よよ
を以て、爾父と子と聖神の至聖なる名の讚榮せらるるが爲なり、今も何時も世世に、
アミン。)

しゅ なんぢ しだい なんぢ ぎょうじ きい なんぢ きせき さんえい た ことば
司祭) 主よ、爾は至大なり、爾の行事は奇異なり、爾の奇蹟を讚詠するに堪うる言
しゅ なんぢ しだい なんぢ ぎょうじ きい なんぢ きせき さんえい た ことば
し。主よ、爾は至大なり、爾の行事は奇異なり、爾の奇蹟を讚詠するに堪うる言
しゅ なんぢ しだい なんぢ ぎょうじ きい なんぢ きせき さんえい た
なし。主よ、爾は至大なり、爾の行事は奇異なり、爾の奇蹟を讚詠するに堪うる
ことば
言なし。

けだしなんぢのぞみ もつ ばんぶつ む ゆう な もの なんぢ けんとう もつ ぞうぶつ たも
蓋爾望を以て萬物を無より有と爲しし者は、爾の權能を以て造物を保
なんぢ せつり もつ せかい おさ なんぢしぎょう もつ ぞうぶつ ごうせい もの しき もつ
ち、爾の摂理を以て世界を治む、爾四行を以て造物を合成せし者は、四季を以
しゅうねん まつと れいち ばんぐん なんぢ まえ おのの ひ なんぢ うた つき なんぢ
て周年を全うせり、靈智の萬軍は爾の前に慄き、日は爾を歌い、月は爾
ほ ほし なんぢ ともな ひかり なんぢ したが ふち なんぢ まえ ふる いづみ なんぢ
を讚め、星は爾に伴い、光は爾に従い、淵は爾の前に戦い、泉は爾に
つと なんぢ てん は まく ごと なんぢち みづ うえ かた なんぢすな もつ うみ かぎ
勤む、爾は天を張ること幕の如く、爾地を水の上に固め、爾沙を以て海を限
なんぢこきゅう ため くうき そそ しんし ぐん なんぢ ほうじ しんししゅ たい なんぢ ふく
り、爾呼吸の爲に空気を漑げり、神使の軍は爾に奉事し、神使首の隊は爾に伏
はい たもく りくよく めぐ た まわ と なんぢ ちか がた
拜し多目のヘルヴィムと六翼のセラフィムとは、環り立ち周り飛んで、爾の近づき難
こうえい おそ おもて おお なんぢ かたどり かた はじめ い つ かみ
き光榮を畏れて面を蔽う、爾は像り難き、始なき、言ひ盡くされぬ神にして、
ち きた ぼく かたち う ひと ぞう な けだししゅさい なんぢ じひ おお よ
地に來りて僕の形を受け、人の像を成せり、蓋主宰よ、爾は慈悲の多きに因り
じんるい あくま くるし み しの すなわちきた われら すく たま われ
て、人類の惡魔に苦めらるるを視るに忍ばず、乃來りて我等を救い給えり、我

ら おんちょう う みと じれん つた おんし おお なんぢ わ せい やから じゆう
等は 恩 寵 を承け認め、慈憐を傳え、恩賜を蔽わず、爾 は我が性の 族 を自由にし、

なんぢ こうたん どうていぢよ ほら せい ことごと ぞうぶつ なんぢあらわ もの ほ
爾 の降誕にて童 貞 女の腹を聖にせり、 悉 くの造物は 爾 現れし者を讃め

うた けだしなんぢわ かみ ち あらわ ひと とも いま なんぢ またてん なんぢ せいしん
歌う、蓋 爾 我が神は地に 現れて人と偕に在せり、 爾 は又天より 爾 の聖神

つかわ ながれ せい そのうち す へび かしら くだ
を遣してイオルダンの 流 を聖にし、 其中に棲む蛇の 首 を砕けり、

ひと あい おう いま みづか なんぢ せいしん おおい よ きた こ みづ せい
人を愛する王よ、今も 親ら、 爾 が聖神の庇蔭に藉りて、 來りて此の水を聖に

ひと あい おう いま みづか なんぢ せいしん おおい よ きた こ みづ せい
せよ。人を愛する王よ、今も 親ら、 爾 が聖神の庇蔭に藉りて、 來りて此の水を聖

ひと あい おう いま みづか なんぢ せいしん おおい よ きた こ みづ
にせよ。人を愛する王よ、今も 親ら、 爾 が聖神の庇蔭に藉りて、 來りて此の水を

せい
聖にせよ、

これ すくい おんちょう こうふく あた たま これ ふきゅう いづみ せいせい
此に 救 の恩 寵、イオルダンの降福を與え給え、此を不朽の 泉、成聖の

たまもの しょざい ゆるし しょびょう いやし あくま ほろぼ もの てきぐん ちか かた もの しんし
賜、諸罪の赦、諸病の醫、悪魔を滅す者、敵軍の近づき難き者、神使

ちから み もの な なんぢ ぞうぶつ がい はか もの これ に いた
の力に満たさるる者と爲して、 爾 の造物を害せんと謀る者の此より逃ぐるを致せ、

けだししゅ われなんぢ きみょう こうえい かつてき ため おそ な よ
蓋 主よ、我 爾 の奇妙にして光榮なる、且 敵の爲に畏るべき名を呼べり、

ねがわ なんぢ じゅうじか しるし もと ことごと てきぐん ほろ
願くは 爾 が十字架の 印 の下に、 悉 くの敵軍は滅びん、

司祭は洗盤の水に十字を書き、息を吹いて祝福する。

ねがわ なんぢ じゅうじか しるし もと ことごと てきぐん ほろ
願くは 爾 が十字架の 印 の下に、 悉 くの敵軍は滅びん、

司祭は洗盤の水に十字を書き、息を吹いて祝福する。

ねがわ なんぢ じゅうじか しるし もと ことごと てきぐん ほろ
願くは 爾 が十字架の 印 の下に、 悉 くの敵軍は滅びん、

司祭は洗盤の水に十字を書き、息を吹いて祝福する。

司祭) (黙誦：主よ、我等 爾 に禱る、 ねがわ われら およそ こうちゆう じったい まぼろし
願くは我等より 凡 の空 中の實體なき 幻 は

しりぞ ねがわ こ みづ くら ま ひそ またせん う もの とも おもい
退 かん、 願くは此の水に暗き魔は潜まざらん、又 洗を領くる者と偕に、 思慮の

くらやみ こころ みだれ おこ きょうあく き くだ ばんゆう しゅさい なんぢこ みづ
暗 と心意の 擾 とを起す 凶 惡の鬼は降らざらん、 萬有の主 宰よ、 爾 此の水を

もつ すくい みづ せいせい みづ れいたい きよめ なわめ ほどき しょざい ゆるし たましい てらし
以て、 救 の水、成聖の水、靈體の 潔、縛の 解、諸罪の 赦、靈 の光照、

ふくせい よくぼん れいしん あらたまり こ おんし ふきゅう ころも いのち いづみ あらわ たま
復生の浴盤、靈神の 更 新、子とするの恩賜、不朽の 衣、生命の 泉 と 顯し給

けだししゅ なんぢい おのれ あら しか いさぎよ あく なんぢら たましい
え、蓋 主よ、 爾 曰えり、 己 を洗えよ、 然らば 潔 くならん、 惡を 爾 等の 靈

さ なんぢ うえ みづ せいしん よ さいせい われら たま しゅ こ みづ
より去れと、 爾 は上より、水と聖神とに由る再生を我等に賜えり、 主よ、此の水に

あらわ たま およ こうち せん う もの へんか かれ まどい よく く ところ
 現れ給え、及び此の中に洗を領くる者を変化せしめて、彼が惑の慾に朽つる所
 ふる ひと ぬ かれ つく もの すがた よ あらた ところ あらた ひと き
 の舊き人を脱ぎ、彼を造りし者の像に因りて改めらるる所の新なる人を衣る
 たま かれ せん もつ なんぢ し さま せつごう ふくかつ ぶん もの な
 を賜え、彼が洗を以て、爾の死の状に接合せられて、復活にも分ある者と爲らん
 ため およ なんぢ せいしん たまもの まも おんちよう へいし ぞうか うえ めし こうむ
 が爲、及び爾の聖神の賜を守り、恩籠の聘質を増加して、上よりの召を蒙
 そんえい う てん しる しゅせい もの くわ ため なんぢかみわ しゅ
 る尊榮を受け、天に録されたる首生の者に加えられんが爲なり、爾神我が主イ
 ススハリストスに依りてなり、)

司祭) けだしこうえい けんぺい なんぢ なんぢ むげん ちち しせいしぜん いのち ほどこ なんぢ しん
 蓋光榮と權柄とは、爾と爾の無原の父と至聖至善にして生命を施す爾の神
 き いま いつ よよ
 とに歸す、今も何時も世に、



司祭) しゅうじん へいあん
 衆人に平安、



輔祭) なんぢら こうべ しゅ かが
 爾等の首を主に屈めよ、



司祭は「喜の油」に三度息を吹きかけ、三度十字を書いて祝福する。

輔祭) しゅ いの
 主に禱らん、



司祭) (黙誦: しゅさい しゅ わ せんそ かみ ふね おもの わぼく しるし こうずい すく
 主宰・主・我が先祖の神、ノイの舟に居る者に、和睦の徴、洪水より救わ

るしるし かんらん こえだ ふく ほと つかわ これ もつ おんちよう おうひ ぜんちよう
 るる號たる、橄欖の小枝を啣む鴿を遣し、此を以て恩籠の奥秘を前兆し、
 なんぢ せいきみつ おこな ため かんらん み あた これ よ ほうりつ もと あもの
 爾の聖機密を行うが爲に橄欖の果を予え、此に由りて、法律の下に在る者にも
 せいしん み おんちよう もと あもの ぜんび しゅ みづか なんぢ せいしん ちから
 聖神を充て、恩籠の下に在る者をも全備する主よ、親ら爾が聖神の力と

はたらき おおい もつ こ あぶら しゆくふく おおい しん もつ これ つ あるい これ くら
擧動と庇蔭とを以て此の油にも祝福して、信を以て之を傳け、或は之を食う

もの ため これ ふきゆう つけ ぎ ぶき れいたい あらたまり およそ あくま はたらき とおざかり
者の爲に、此を不朽の傳、義の武器、靈體の更新、凡の惡魔の擧動の遠隔、

およそ あく はなれ な たま
凡の惡の解離と爲らしめ給え、)

司祭) なんぢ なんぢ どくせいし しせいしぜん いのち ほどこ なんぢ しん こうえい ため いま
爾と爾の獨生子と、至聖至善にして生命を施す爾の神との光榮の爲なり、今も

いつ よよ
何時も世に、



輔祭) つつし き
謹みて聽くべし、



司祭は油を以て水に十字を書いて祝福する。

司祭) あが ほ かなかみ およそ よ きた ひと こうしょう およ せいせい もの いま いつ
崇め讃めらるる哉神、凡の世に来る人を光照し、及び成聖する者よ、今も何時も

よよ
世に、



司祭) かみ ぼくひ よるこび あぶら つ ちち こ せいしん な よ いま いつ よよ
神の僕(婢)(某)喜の油を傳けらる、父と子と聖神の名に因りてなり、今も何時も世
に、アミン。 司祭は洗礼を受ける者の額・目(まぶた)・鼻・口に油を十字形に傳ける。

司祭) たましい からだ いや ため
靈と體とを痊すが爲、

同じく胸元・両肩の間に油を傳ける。

司祭) おしえ き ため
教を聽くが爲、

同じく耳に油を傳ける。

司祭) なんぢ てわれ つく われ もう
爾の手我を造り、我を設けり、

同じく手に油を傳ける。

司祭) なんぢ いましめ みち ふ ため
爾が誠の路を履むが爲なり、

同じく足に油を傳ける。

*続けて司祭は彼に洗礼を行う。全身を浸せるならば彼の全身を水に浸す。洗盤の小さい時には彼の首を盤上に伸べさせ、その上から水を掛ける。

司祭) かみ ぼくひ せん う ちち およ こ およ せいしん な よ
神の僕(婢)(某)洗を領く、父、アミン、及び子、アミン、及び聖神の名に因りてなり、ア

いま いつ よよ
ミン、今も何時も世に、アミン。

司祭は用意された洗礼着・イコン・十字架・福音書等を成聖する。

濡れた頭や体はタオル等で拭くこと。

司祭) ^{かみ ぼく ひ ぎ ころも き ちち こ せいしん な よ いま いつ よよ} 神の僕(婢)(某)義の衣を衣せらる、父と子と聖神の名に因りてなり、今も何時も世世に、アミン。

洗礼着と十字架は洗礼を受けた者に着ける。

ひかりをころものごとくきる だいじんじなるハリストスわがかみ
光 袍 如 衣 大 仁慈 我 神

よ、われにこうめいのころもをあたまえ給。
我 光 明 衣 予 給

司祭) (黙誦: ^{あが ほ かな しゅ かみ ぜんのうしゃ ばんぜん みなもと ぎ ひ もの なんぢ} 崇め讃めらるる哉、主・神・全能者、萬善の源、義の日なる者よ、爾

^{そのどくせいし われら かみ あらわ もつ くらやみ お もの すくい ひかり て およ} は其獨生子、我等の神の顯るるを以て、幽暗に居る者に救の光を照らし、及

^{ふとう われら せいすい お ふく きよめ いのち ほどこ ふこう お しんみょう} び不當なる我等に、聖水に於ける福たる浄と生命を施す傅膏に於ける神妙なる

^{せいせい たま いま みづ せいしん もつ あらた こうしょう なんぢ ぼく ひ また} 成聖とを賜い、今も、水と聖神とを以て、新に光照せられし爾の僕(婢)を再

^{う よろこ ならび かれ じゆう ふじゆう つみ ゆるし たま しゅさい いつくしみふか} 生むを喜び、並に彼に、自由と不自由との罪の赦を賜えり、主宰・慈深き

^{ばんゆう おう なんぢみづか またかれ なんぢ ぜんのう ふくはい せいしん おんし} 萬有の王よ、爾親ら、亦彼に、爾の全能なる、伏拜せらるる聖神の恩賜の

^{しるし およ なんぢ せいたいせいけつ う たま かれ なんぢ せいせい まも} 印、及び爾のハリストスの聖體尊血を領くることを賜え、彼を爾の成聖に護

^{せいきょう かた きょうあくしゃ そのことごと しわざ たす なんぢ お すくい おそれ} り、正教に堅め、凶悪者と其悉くの所爲より援け、爾に於ける救の畏を

^{もつ かれ たましい けつじょう ぎ まも たま かれ およそ おこない ことば おい なんぢ} 以て、彼の靈を潔浄と義とに護り給え、彼が凡の行と言とに於て爾の

^{よろこ ところ な なんぢ てんごく こおよ よつぎ な ため} 喜ぶ所と爲りて、爾が天國の子及び嗣と爲らんが爲なり、)

司祭) ^{けだしなんぢ われら かみ あわれ かつすく かみ われらこうえい なんぢちち こ せいしん けん} 蓋爾は我等の神、憐み且救う神なり、我等光榮を爾父と子と聖神に獻ず、

^{いま いつ よよ} 今も何時も世世に、

アミン。

司祭) ^{せいしん おんし しるし} 聖神の恩賜の印、アミン。

司祭は洗礼を受けた者の額に聖膏を十字形に傅ける。

司祭) ^{せいしん おんし しるし} 聖神の恩賜の印、アミン。

同じく目(まぶた)に聖膏を傅ける。

司祭) ^{せいしん おんし しるし} 聖神の恩賜の印、アミン。

同じく鼻に聖膏を傅ける。

司祭) 聖神の恩賜の印、アミン。

同じく口に聖膏を傅ける。

司祭) 聖神の恩賜の印、アミン。

同じく耳に聖膏を傅ける。

司祭) 聖神の恩賜の印、アミン。

同じく胸元に聖膏を傅ける。

司祭) 聖神の恩賜の印、アミン。

同じく手に聖膏を傅ける。

司祭) 聖神の恩賜の印、アミン。

同じく足に聖膏を傅ける。

*続けて、司祭、洗礼を受けた者及び代父母は洗盤の周りを三度廻る。廻る時、次の歌を歌う。



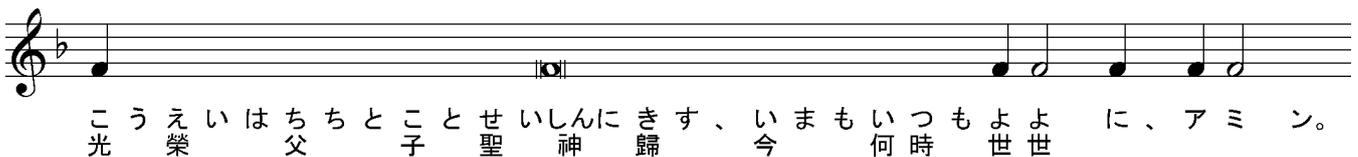
ハリストスにおいて せんをうけ しものハリスト スをきた り、ア Ril イ ヤ。
於 洗 受 者 衣



ハリストスにおいて せんをうけ しものハリスト スをきた り、ア Ril イ ヤ。
於 洗 受 者 衣



ハリストスにおいて せんをうけ しものハリスト スをきた り、ア Ril イ ヤ。
於 洗 受 者 衣



こうえいはちちとことせいしんにきす、いまもいつもよよに、アミン。
光 榮 父 子 聖 神 歸 今 何 時 世 世



ハリスト スを衣た り、ア Ril イ ヤ。



ハリストスにおいて せんをうけ しものハリスト スをきた り、ア Ril イ ヤ。
於 洗 受 者 衣

【 提綱 第三の調 】

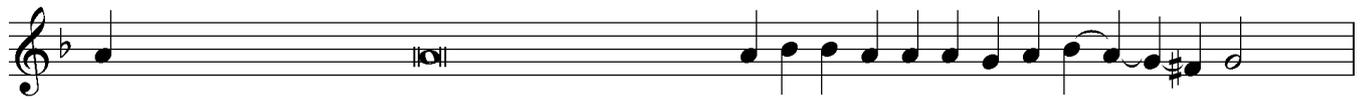
輔祭) 睿智、

誦經) プロキメン、主は我が光、我が救なり、我誰をか恐れんや、



しゅわがひかり、わがすくいなり、われだれをかおそれんや。
主 我 光 我 救 我 誰 誰 を か お 恐

誦經) 主は我が生命の防固なり、我誰をか懼れんや、



しゅわがひかり、わがすくいなり、われだれをかおそれんや。
 主我光我救我誰をかおそれんや。

誦經) ^{しゅわひかりわすくい} 主は我が光、我が救なり、



われだれをかおそれんや。
 我誰をかおそれんや。

【 使徒經 (アポストロス) ロマ書6章3～11節 】

輔祭) ^{えいち} 睿智、

誦經) ^{せいしとじん たつしよよみ} 聖使徒パウエルが羅馬人に達する書の讀、

輔祭) ^{つつしき} 謹みて聽くべし、

誦經) ^{けいてい われらおいせんうものみなかれしおいせんう} 兄弟よ、我等ハリストスイスに於て洗を領けし者は、皆彼の死に於て洗を領けし

^{ゆえ われらし おせんもつかれともほうむちちこうえいもつ} なり。故に我等は死に於ける洗を以て彼と偕に葬られたり、ハリストスが父の光榮を以

^{し ふくかつごと われらあらたいのちわたため けだしわれらもかれ} て死より復活せし如く、我等も新にせられたる生命を度らん爲なり。蓋我等若し彼の

^{しならもつかれせつごうすなわちふくかつならもつせつごう} 死に效うを以て、彼と接合せられしならば、乃復活に效うを以ても、接合せらるべ

^{けだしわれらし われらふるひとかれともてい つみみほろぼわれらまた} し。蓋我等知る、我等の舊き人は彼と偕に釘せられたり、罪の身滅されて、我等復

^{つみどためしものつみとよわれらもともし} 罪の奴とならざらん爲なり、死せし者は罪より釋かれしに因る。我等若しハリストスと偕に死

^{すなわちまたかれともいしんけだしししふくかつまたし} せば、則亦彼と偕に生きんことを信ず、蓋知る、ハリストスは死より復活して復死せ

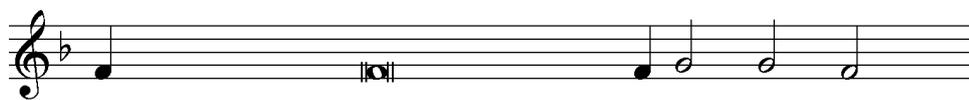
^{しまたかれしゅかれしつみためひとたびしかれいかみため} ず、死は復彼に主たらざるを、彼の死せしは罪の爲に一次死し、彼の生くるは神の爲に

^{いしかごとなんぢらおれもつわれらしゅあつみ} 生くればなり。是くの如く爾等も己を以て、ハリストスイス我等の主に在りて罪の

^{ためしかみためいものおも} 爲に死し、神の爲に生くる者と意え、

司祭) ^{なんぢへいあん} 爾に平安、

輔祭) ^{えいち} 睿智、



ア リ ル イ ヤ、ア リ ル イ ヤ、ア リ ル イ ヤ。

【 福音經 (エヴァンゲリオン) マトフェイ福音書28章16～20節 】

輔祭) 睿智、肅みて立て、聖福音經を聴くべし、

司祭) マトフェイ傳の聖福音經の讀、

輔祭) 謹みて聴くべし、

司祭) 彼の時、十一の門徒がガリレヤに往きて、イイススの彼等に命ぜし山に至り、彼を見て

拜せり、然れども猶疑える者ありき。イイスス就きて、彼等に語げて曰えり、天に在り地に

在る一切の權は我に與えられたり、故に爾等往きて、萬民に教を傳えて、彼等に父

と子と聖神との名に因りて洗を授け、彼等を教えて、我が一切爾等に命ぜしことを守ら

しめよ、視よ、我恒に爾等と偕にして世の終末まで在るなり、アミン。

輔祭) 主に禱らん、



しゅあわれめよ。
主憐

司祭) (黙誦：聖洗を以て爾の僕(婢)に諸罪の赦を賜い、彼に復生の生命を予えし

主宰・主よ、爾親ら彼の心に、爾が顔の光の常に輝くを賜え、其信

の盾を敵に敗れずして守り、已に衣せし不朽の衣を彼の中に汚なく玷なく

保ち、爾の恩寵を以て、聖神の印を彼の中に損われずして護り、爾が恵

の多きに依りて、彼と我等とに慈憐を垂れ給え、)

司祭) 蓋爾父と子と聖神の至尊至嚴の名は讚美讚榮せらる、今も何時も世世に、



アミン。

輔祭) 主に禱らん、



しゅあわれめよ。
主憐

司祭) (黙誦：主宰・主・我等の神、洗盤を以て天の光明を洗を領くる者に予え、水

と聖神とを以て新に光照せられし爾の僕(婢)を再生み、并に彼に、自由と

ふじゆう つみ ゆるし たま もの なんぢ けんとう て かれ の なんぢ しぜん のうりよく
不自由との罪の赦を賜いし者よ、爾が権能の手を彼に按せ、爾が至善の能力

うち かれ まも そのへいし うば ゆる かれ えいえん いのち なんぢ よろこび
の中に彼を護れ、其聘質の奪わるるを許さずして、彼を永遠の生命と爾の喜と

あた もの たま
に當る者とならしめ給え、)

司祭) 蓋 爾は我等の成聖なり、我等光榮を爾父と子と聖神に獻ず、今も何時も世に、



司祭) 衆人に平安、



司祭) 爾等の首を主に屈めよ、



司祭) (黙誦: 爾ハリストス我が神を衣たる者は、其首を我等と偕に爾に屈めり、祈る

かれ まも かれ われら いたづら あだ かま もの たい やぶ ぐんし
彼を守りて、彼と我等とに徒に仇を構うる者に対して敗られざる軍士となし、

なんぢ ふきゆう えいかん もつ われしゅう おわり いた か もの あらわ たま
爾が不朽の榮冠を以て我衆を終に至るまで勝つ者と現し給え、)

司祭) 蓋 憐み且救うことは爾に屬す、我等光榮を爾と爾の無原の父と至聖至善に

いのち ほどこ なんぢ しん けん いま いつ よよ
して生命を施す爾の神とに獻ず、今も何時も世に、



司祭は濡らした海綿にて、洗礼を受けた者の額等（聖膏を傅けた處）を拭う。

司祭) 爾は義にせられたり、照らされたり、聖にせられたり、滌われたり、我が主イイスハリ

な わ かみ しん よ
ストスの名と我が神の神とに因りてなり、

なんぢ せん て ふこう せい あら われたり ちち
爾は洗せられたり、照らされたり、傅膏せられたり、聖にせられたり、滌われたり、父と

こ せいしん な よ いま いつ よよ
子と聖神の名に因りてなり、今も何時も世に、



アミン。

輔祭) ^{しゅ いの}主に禱らん、



しゅあわれめよ。
主憐

司祭) (黙誦: ^{しゅさい しゅ われら かみ なんぢ ぞう もつ ひと とうと これ ちえ たましい}主宰・主・我等の神、爾の像を以て人を尊くし、此を智慧ある靈と

^{びれい からだ もつ あわ つく からだ ちえ たましい つと こうべ そのうえ お}美麗なる軀とを以て合せ造り、軀をして智慧の靈に勤めしめ、首を其上に置

^{こ うち かんとう おお う あいおか かみ もつ こうべ おお きこう}き、此の内に官能の多きを植えて相侵さざらしめ、髪を以て首を覆いて、氣候の

^{へんどう ため そこな ならび よ かれ ひやくたい そな ことごと これ もつ}変動の爲に損われざらしめ、并に善く彼の百體を備えて、悉く此を以て

^{なんぢせいみょう びじゅつし かんしゃ しゅ なんぢ えら うつわ した}爾精妙なる美術師に感謝せしむる主よ、爾の擇びし器なる使徒パヴェルを

^{もつ われら およそ ことなんぢ こうえい ため おこな いまし しゅさい もと なんぢみづか}以て、我等に、凡の事爾が光榮の爲に行うを戒めし主宰よ、求む爾親

^{そのこうべ かみ か はじめ まつり な ため きた なんぢ ぼくひ その}ら、其首の髪を剪りて、初の祭を成すが爲に來りし爾の僕(婢)(某)と其

^{じゅたくしゃ ふく くだ かれら みななんぢ ほう なら なんぢ よろこ ところ おこな たま}受託者とに福を降し、彼等に、皆爾の法を習い、爾が悦ぶ所を行うを賜

え、)

司祭) ^{けだしなんぢ じれん ひと あい かみ われらこうえい なんぢちち こ せいしん けん いま}蓋爾は慈憐にして人を愛する神なり、我等光榮を爾父と子と聖神に獻ず、今も

^{いつ よよ}何時も世に、



アミン。

司祭) ^{しゅうじん へいあん}衆人に平安、



なんぢのしんにも。
爾神

輔祭) ^{なんぢら こうべ しゅ かが}爾等の首を主に屈めよ、



しゅなんぢに。
主爾

司祭) (黙誦：洗盤の充満に依り、爾の仁慈を以て爾を信ずる者を聖にせし主、我
 らかみ こ こ ふく くだ たま ねがわ なんぢ こうふく そのこうべ のぞ よげんしゃ
 等の神よ、此の子に福を降し給え、願くは爾の降福は其首に臨まん、預言者
 サムイルを以てダヴィド王に福を降しし如く、我罪人の手を以て爾の僕(婢)(某)
 こうべ ふく くだ なんぢ せいしん もつ かれ いた たま かれ せいちょう しらが いた
 の首にも福を降して、爾の聖神を以て彼に格子給え、彼が生長して白髪に至
 まで しょうがいこうえい なんぢ き およ さいわい み ため
 る迄も、生涯光榮を爾に歸し、及びイェルサリムの福を觀んが爲なり、)

司祭) 蓋凡そ光榮、尊貴、伏拜は爾父と子と聖神に歸す、今も何時も世に、



司祭) 神の僕(婢)(某)剪髪せらる、父と子と聖神の名に因りてなり、今も何時も世に、



司祭は洗礼を受けた者の髪を十字形に剪り、初の獻物とする。

【 重連禱 】

輔祭) 神よ、爾の大なる憐に因りて我等を憐めよ、爾に禱る、聆き納れて憐めよ、



輔祭) 又我國の天皇及び國を司る者の爲に禱る、



輔祭) 又教會を司る尊貴なる我等の全日本の府主教ダニイル、尊貴なる仙台の大

主教セラフィム、及びハリストスに於ける悉くの我等の兄弟の爲に禱る、



輔祭) 又神の僕婢・受託者(某)に、慈憐、生命、平安、壮健、救贖及び諸罪の赦

たま ため いの
を賜わんが爲に禱る、



しゅあわれめ、しゅあわれめ、しゅあわれめよ。
主 憐 主 憐 主 憐

またあらた こうしょう かみ ぼくひ ため いの
輔祭) 又 新に光 照せられし神の僕(婢)(某)の爲に禱る、



しゅあわれめ、しゅあわれめ、しゅあわれめよ。
主 憐 主 憐 主 憐

かれ じゅんせい おしえ うけとめ およそ けいけん いましめ じゅうじゅん まも
輔祭) 彼が醇 正の教の承認と凡の敬虔とハリストスの誠の従順とに守られんが

ため いの
爲に禱る、



しゅあわれめ、しゅあわれめ、しゅあわれめよ。
主 憐 主 憐 主 憐

けだしなんぢ じれん ひと あい かみ われらこうえい なんぢちち こ せいしん けん いま
司祭) 蓋 爾は慈憐にして人を愛する神なり、我等光榮を爾父と子と聖神に獻ず、今も

いつ よよ
何時も世世に、



ア ミ ン。

洗礼を受けた者が赤子ならば、司祭彼を抱き、彼にて十字を書く。

かみ ぼくひ きょうかい い ちち こ せいしん な よ いま いつ よよ
司祭) 神の僕(婢)(某)教會に入れらる、父と子と聖神の名に因りてなり、今も何時も世世に、



ア ミ ン。

司祭) (黙誦： 爾の家に入り、 爾が聖堂に伏拜せん、)

司祭は洗礼を受けた者を連れ、聖堂中央に進む。

かみ ぼくひ きょうかい い ちち こ せいしん な よ いま いつ よよ
司祭) 神の僕(婢)(某)教會に入れらる、父と子と聖神の名に因りてなり、今も何時も世世に、



ア ミ ン。

司祭) (黙誦： 爾を會中に讃め揚げん、)

同じく、王門前に進む。

司祭) ^{かみ ぼく ひ} 神の僕(婢) ^{きょうかい い} (某) 教 會 に入れる、^{ちち こ せいしん な よ} 父と子と聖 神の名に因りてなり、^{いま いつ よよ} 今も何時も世世に、



ア ミ ン。

洗礼を受けた者が男子ならば至聖所内に進む。女子ならばその場にて。

司祭) (^{しゅさい いまなんぢ} 黙誦: 主宰よ、今 爾 ^{ことば} の 言 に 循 ^{したが} い 爾 ^{なんぢ} の 僕 を ^{あんぜん} 安 然 と して 逝 ^ゆ か し め 給 ^{たま} う。 蓋 ^{けだしわ} 我 が
^{め なんぢ ばんみん まえ そな すくい み} 目 は 爾 の 萬 民 の 前 に 備 え し 救 を 見 た り、^{こ いほうじん てら ひかり なんぢ} 是 れ 異 邦 人 を 照 す の 光 と 爾 が イズラ
^{みん さかえ} イリ 民 の 榮 な り)

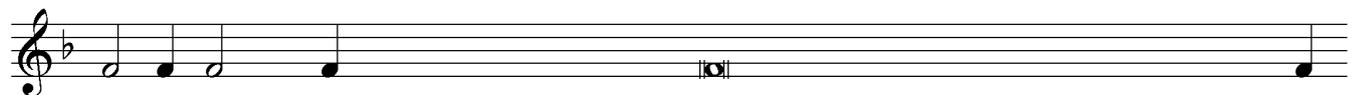
洗礼を受けた者が赤子ならば王門前に置かれる。代父母は伏拜して彼を抱き取り、後へ退く。成人ならば代父母は彼を連れて後へ退く。

輔祭) ^{えいち} 睿 智、

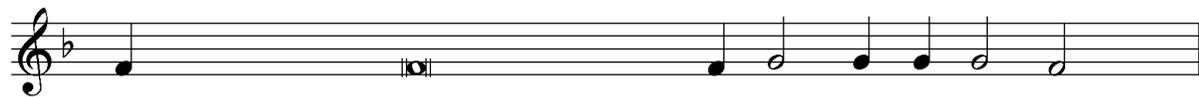
司祭) ^{えいざい しゅ} 永 在 の 主 ハリス ト ス 我 等 の 神 は 恒 に 崇 め 讃 め ら る、^{われら かみ つね あが ほ} 今 も 何 時 も 世 世 に、^{いま いつ よよ}



ア ミ ン。



^{か み} 神 よ、^{わが くに} 我 國 の ^{てん のう} 天 皇 と ^{せい きょう かい} 正 教 會 の ^{おしえ} 教 と ^{せい きょう} 正 教 の



^{ハリ スティ ア ニン} ら を ^{よ よ} 世 世 に ^{か た} 固 た め 給 ^え え 。

司祭) ^{しせい} 至 聖 なる 生 神 女 よ、^{しょうしんぢよ} 我 等 を 救 い 給 え、^{われら すく たま}



^{ヘルヴイムより} 尊 ^{うとく} と く セ ラ フ イ ム に な ら び な く さ か ^え え、^{み さ お} み さ お を ^{やぶ} や ぶ

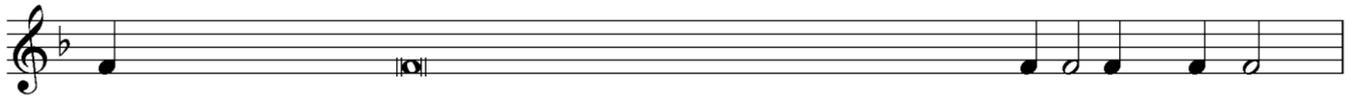


^{ら ず} ら ず し て ^{か み} 神 ^{こ 言} 言 と ば を ^{う み} 生 ^し し、^{じつ の しよ} じ つ の し よ ^{う しんぢよ} 生 神 女 ^{た る} た る ^{な んぢ} 爾 ち を

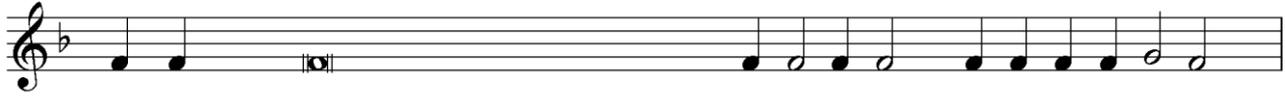


^{あ が め} 崇 ^{ほ ん} 讃 む 。

司祭) ^{かみわれら たのみ} ハリス ト ス 神 我 等 の 特 よ、^{こうえい なんぢ き} 光 榮 は 爾 に 歸 す、^{こうえい なんぢ き} 光 榮 は 爾 に 歸 す、



こう えい ちち こ せい しん き いま いつ よよに、アミン。
光 榮 は 父 と 子 と 聖 神 に 歸 す、 今 も 何 時 も 世 世 に、 ア ミ ン。



しゅ あわれ しゅ あわれ しゅ あわれ ふく くだ
主 憐 め、 主 憐 め、 主 憐 めよ、 福 を 降 せ。

司祭) ハリストス我等の眞の神は、其至浄なる母・・・、日本の亜使徒主 教 聖ニコライ、

われら まこと かみ そのしじょう はは にほん あしとしゅきょうせい
聖にして義なる神の祖父母イオアキム及びアンナ及び諸聖人の祈禱に因りて我等を 憐

すく かれ ぜん ひと あい しゅ
み救わん、彼は善にして人を愛する主なればなり、



ア ミ ン。

輔祭) 主よ、新に光照せられし神の僕(婢)(某)に、萬福にして平安なる度生、壮健と

きゅうしょく およ ばんじ おけ よ しんぼ あた かれ いくとせ まも たま
救 贖、及び萬事に於る善き進歩を與えて、彼を幾年にも護り給え、



い く と せ も い く と せ も い く と せ も
幾 歳 せ も 幾 歳 せ も 幾 歳 せ も



い く と せ も い く と せ も い く と せ も
幾 歳 せ も 幾 歳 せ も 幾 歳 せ も



い く と せ も い く と せ も い く と せ も
幾 歳 せ も 幾 歳 せ も 幾 歳 せ も



い く と せ も い く と せ も い く と せ も
幾 歳 せ も 幾 歳 せ も 幾 歳 せ も



い く と せ も い く と せ も い く と せ も
幾 歳 せ も 幾 歳 せ も 幾 歳 せ も



い く と せ も い く と せ も い く と せ も
幾 歳 せ も 幾 歳 せ も 幾 歳 せ も